



Books 案内

奄美のノネコ ～猫の問いかけ

鹿児島大学鹿児島環境学研究会編
南方新社 2019 282頁
2,000円+税



大学・行政・市民の協働による、 地域を次世代につなぐ取り組み

ESD（持続可能な開発のための教育）の実践

本書は、世界自然遺産登録を目指す奄美大島と徳之島のノネコの問題解決の取り組みを「社会実験」とみなし、それをまるごと紹介した貴重な記録です。課題を認識した人たちが周囲を巻き込みながら集団として課題解決に携わり、それを地域の発展につなげようとするこの活動は、ESDの実践でもあります。

外来生物としてのノネコ問題とその特殊性

ノネコ（野生化したネコ）＝有能なハンターが何を食べているかはとても気になります。地域の生物多様性へどんな影響を与えているのか。この、外来生物としてのノネコ問題は、日本各地で起こっている自然保護問題のひとつです。

ネコが他の外来生物と違うのは、その人との関係です。国内での屋内飼育頭数は978万頭¹⁾とも言われています。この他に、多くの農村には、倉庫のネズミ番としてネコが普通に放し飼いにされています。捨てられ野良になるネコも後を絶ちません。この野山へのネコ供給問題とともに、捕獲したノネコの処分問題が困難を極めます。欧米では安楽死が選択されますが、奄美では安楽死ではなくTNR（生け捕り→不妊化手術→解放）や、捕獲後の馴化と譲渡をしています。そうなる理由を、著者の一人、小栗有子さんは「手なづ

编者紹介

鹿児島環境学研究会

鹿児島大学が2008年に立ち上げた分野横断型の研究プロジェクト。大学教員の他に行政や企業、団体の職員や市民が参加。「精緻な批評であるよりは、たとえ小さくとも具体的な提案を目指す」との「鹿児島環境学宣言」を2009年に発表。『鹿児島環境学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』など、これまでに専門家以外の方々に向けた書籍を7冊刊行。本書はその最新刊。

けられた動物へ特別の思い」を抱く日本の文化や命をめぐる日本人の動物観の問題と分析しています。

本書の構成～ノネコ対策の貴重な記録

本書は7つの章と資料編からなります。第1章は本書の意図や構成を解説した羅針盤。第2章はニュージーランドの先進対策の紹介と日本との比較。第3・4章では奄美大島と徳之島での具体的な活動が、その実行者によって紹介されています。ノネコ問題にどう気づき、意識し、解決に向けて動き出したかが活写されており、本書の中心部です。第5章はノネコ問題の核心である法的な位置づけとTNR問題が紹介されています。第6章では国内各地のノネコ問題が紹介されています。そのため本書は国内ノネコ問題の資料集でもあります。

第7章は、本書の企画編集にあたった鹿児島大学鹿児島環境学研究会の自己分析です。なぜノネコ問題がこのように多くの人々を巻き込んで多角的に取り組まれたのか。その理由が第7章で解き明かされます。

成功の鍵は当事者の参画による議論と学習

この「社会実験」では、対策を担う行政（国・県・市町村）や大学、有志の市民が常に生の地域（地図にあるコミュニティ）に立ち回り、ともに考えようとする姿勢が貫かれています。地域づくりのために当事者が堅持すべきは、現場に学びつつ、共通のゴール～ここでは「次世代につなぐ島」～を学習と議論によって再確認し、その都度ゴールを共有しなおす姿勢なのだ、と、教えられます。

1) <https://petfood.or.jp/topics/img/191223.pdf>

（^{くが} ^{のし} 陸 斉 / 自然環境部）

